『「レズビアン」である、ということ』

掛札悠子 著

河出書房新社　一九九二年

Keyword
セクシュアリティ
マイノリティ
同性愛
フェミニズム
カミングアウト

本書は、一九九〇年代前半にレズビアン・コミュニティを人並みすぐれた行動力で牽引した女性のカミングアウト本である。「カミングアウト本」というと、「いつ、なにがきっかけで自分が『同性愛者』であることに気がついたか、そのことでどれほど悩んだか、どうやってそれを乗り越えたか、あるいは乗り越えきれていないか」［五〇頁］を綴った物語を期待するかもしれないが、本書はそうした取っ付きの良い内容ではない。ここに収められているのは、著者、掛札悠子（かけふだひろこ、一九六四―）二七歳の、早熟な思索の軌跡とその到達点である。

掛札は、エイズ予防法反対運動（一九八八）への参加をきっかけに、セクシュアル・マイノリティに関する運動や執筆をマスメディアに顔を出して進めていくことになった。これは、自身が後に述懐している通り、当時（今でもだが）たいへんな勇気を要することだった。「書店の店頭に並ぶ数週間前には、『出版されなければいいのに』と真剣に願っていた。（中略）殴られるのではないか、ののしられるのではないか、つきとばされるのではないか」［一九九七、一六三頁］と。

掛札以前に、レズビアンやバイセクシュアル女性による活動がなかったわけではない。しかし、それまでの活動は、仲間とつながることを主目的としており、差別の現実をコミュニティ外部へ発信するものではなかった。公共施設を利用したイベントでは、参加者を守るために「レズビアン」の語の使用が控えられ、活動の中心にいたスタッフも本名を出せなかった。誰もがクローゼットだった時代。掛札がその外へと一歩を踏み出したのは、そういう時代である。

折しも、ゲイ男性による一般社会へのアピールが始まっており、彼らの動きに後押しされるように、掛札は、コミュニティの内外に積極的に働きかけていった。テレビ番組への出演（一九九一）、本書の出版（一九九二）、全国九都市を回る講演の実施（一九九四）など、外に見える活動を続ける一方、内部のネットワーク作りにも力を尽くし、購読者一六〇〇人を誇ったミニコミ誌『LABRYS』（一九九二―五）を編集発行し続けた。一九九五年にはレズビアン／バイセクシュアル女性のためのスペース「LOUD」を創設している。こうした活動へ「レズビアンとして」向かっていくために、掛札は「『私はレズビアンである』と表明すること」の意味を、深く考えなければならなかったのだと思う。そして、考えるために書いたのである。

本書で触れられる内容は多岐に渡り、論点が忙しく入れ替わる。しかし、すべての考察がタイトルに収拾されるという点では、ぶれがない。論点が多くなってしまうのは、『「レズビアン」である、ということ』（タイトル）はどういうことか、という問いが、いろいろなかたちで言い換えられ、様々な角度から検討されるからである。

まず掛札は、この問いを「『レズビアン』とはだれのことを指すのか」と言い換え、考察を進める。ここで吟味されるのは、掛札に「レズビアンだなんて。わたしはあんな人間じゃない」［九頁］という感情を喚起させ、「レズビアンであること」から逃げ続けさせた、否定的な「レズビアン」イメージである。それは、ポルノグラフィにおける「性欲」のみが強調された「レズビアン」であり、心理学、医学、精神分析などが「異常」「倒錯」というレッテルを貼った「レズビアン」である。

「レズビアン」を汚染するのは、俗なポルノグラフィや客観性を傘に着る「科学」だけではない。フェミニズムもまた、自らの主張に引きつけて「レズビアン」を解釈してきた。曰く、「レズビアン」はシスターフッドの感情（社会的地位の低さから生じる女性同士の共感）にもとづいている。「レズビアンになった」のは男性優位社会に抵抗するためである。「レズビアン」は主体的で対等なセックスをすることを選んだ女である。

掛札は、「レズビアン」に塗られてきたこうした過剰な意味づけを、根気よく削ぎ落としていく。そこでなされているのは、「レズビアン」に対する偏見、「女」の性や快楽についての固定観念を問い質すだけでなく、自分と「レズビアン」という言葉の間にある溝を埋める作業である。

ポルノや「科学」はもとより、「レズビアン」への好意に満ちたフェミニズムの言説も、「レズビアン」を一つの型に押し込めてしまう。「レズビアンであること」自体に、政治的な理由も「科学」的な原因も必要ない。「理由をもつ」という人の個別の経験は否定すべきでないが、「理由を述べる」ことには慎重であるべきだ。「理由を述べる」と「レズビアン」に新たなイメージを与えてしまうし、何らかの理由や原因によって「（レズビアンに）なった」という述部を引き寄せてしまう。「レズビアン」とは「なるものだ」というイメージは、理由や原因の詮索につながっていき、

理由や原因に関する言説の増幅によって、また別の「レズビアン」イメージが捏造されていく。

掛札は、こうした言説の効果を承知している。だから、「レズビアン」を一貫して「である」ものとして扱おうと、次のように見定めるのである。「『レズビアンである』と言うことは、『今、自分が親密な関係をつくっている（つくろうとしている）のは女性である○○さんだ』という事実を示すひとつの方法でしかない」［二二頁］。こうして、「レズビアン」と「私」との間にある溝を埋めてから、掛札は「レズビアンとして」この社会で生きる現実を、他者に向けて発信していくのである。

「『レズビアン』とはだれのことを指すのか」という問いは、否定的なイメージから自由になるために発せられたものであるから、「『レズビアンであること』を肯定的に受け止めること、とはどういうことか」、そしてそれが「いかに難しく、なぜ難しいのか」という（言い換えられた）問いと不可分である。掛札も指摘するとおり、「『レズビアンであること』を肯定的に受け止めること」は、「レズビアンであること」と違って、社会的な行為である。それは「なにが自分を縛っているのかを知っておこうとする」［一九〇頁］行為、すなわち社会の規範を相対化する行為であり、女性への欲望を否定しようとする社会の力に抵抗する行為でもあるからだ。

タイトルに背負わせた問いは、その後も次々と言い換えられ、論じられていく。「レズビアンであることは、この社会においてどのような意味をもつのか」「レズビアンはどんな困難に直面しているのか」「レズビアンにとってカムアウトしない世界はどのようなものか」「レズビアンであることを、なぜことさらに言わなくてはならないのか」「レズビアンとゲイ男性／異性愛女性の現実はどのように違うのか」「レズビアンである私の欲望は、女性の何へと向かっているのか」「レズビアンとしてどのように生きていこうとしているのか」……。

これらの問いはいずれも、レズビアンに対する差別の現実を照らすために立てられているが、差別は社会のなかで起こるものだから、議論は当然、社会の批判的洞察へと向かう。掛札は、レズビアン差別に連なる事柄を丹念に辿り、批評に乗せていく。たとえば、婚外子差別、「一・五七ショック」（一九九〇）に対する政府の対応、夫婦別姓を求める動き、環境保護や消費者運動で利用される「母」のイメージ、といった諸問題から、レズビアン差別の実態と仕組みを明らかにしていくのである。この点において、本書は話題満載の社会評論である。しかし、そうした考察とて、「同性愛者」であり「女」であるという現実を受け入れるために必要だった、掛札のライフストーリーの一部である。

掛札は「レズビアンとして」語ることを引き受けながら、

本書で述べられることは「レズビアン一般」の経験ではないと何度も念押しする。「レズビアンである私個人」の生（ライフ）の記述である、というスタンスが崩されることはない。それは、「私はだれ？」という掛札の自問自答が呼び水となり、皆が「私はだれ？」と問い、語り始めることを期待したからであった。レズビアン（あるいは女）たちが各々に自分たちの現実を語れば、「レズビアン（女）」の多様性があらわになり、他者から押しつけられる画一的なイメージを無効にできる。さらに、「お互いの生きている現実は違うのだ」という確認もできる。そうした差異の確認こそ、他者の生きる現実を尊重し合う共生社会のために肝要なことだと掛札は考えていた。

しかし、掛札はその後、本書に託した期待が裏切られたと告げるに至る。周囲は、自分については沈黙し、掛札に「ただ問うだけの人」であり続け、掛札だけが語ることを止められない。「なぜ、あなたはあなた自身の輪郭をたどってみようとしないのか。私が私自身のためにそうしようと長い間、試みているように」［一九九七、一六六頁］。

また、自分自身をも裏切る結果になったことに失望を隠さない。「そんなものがあるはずもないのに『より一般的なレズビアン』を外側に向けて演じようとして、私は私自身との間に深い溝をつくってしまった。私の心の中でやがて破綻は深刻なものとなり、『レズビアンとして』社会に向かうことすべてを一九九五年の夏、やめた」［一九九七、一六八頁］。掛札は、本書では「私というひとりのレズビアンとして」語りかける態度を貫いた。しかし実際の活動では、「レズビアン全体」を守るために、世間が受け入れやすい「恋愛をし家族をつくろうとするごく普通の女のイメージ」［同、一六九頁］を演じざるを得なかった。「レズビアン」と「私」との断絶は、本書で埋めたはずだった。それが五年を経て、同じ地点に舞い戻ってしまった、という徒労感。一九九七年に発表された論考は「私は逃げる」の一文で締められ、その後、掛札は口をつぐんだままである。

本書はカミングアウト本である、と書いた。しかしカミングアウトとは、一方的な告白ではない。それを受け止め、応答する他者によって完結するコミュニケーションである。掛札が苛立ち落胆したのは、彼女に呼びかけられた私たちが満足に応答できなかったからだが、十分な応答が果たされていないという意味において、本書は未完のカミングアウト本である。

（杉浦郁子）

■参考文献

掛札悠子「抹消（抹殺）されること」河合隼雄・大庭みな子編『家族と性（現代日本文化論二）』岩波書店、一四七―一七一頁、一九九七年